
鎮魂歌

そら@星空

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎮魂歌

【Nコード】

N2908N

【作者名】

そら@星空

【あらすじ】

魔法が存在する謎の異世界――

千年に一度だけ現れる女神アルテミス――

死神と呼ばれる者たち――

普通の高校生、千石和樹と異世界の住人、シン・バース

この二人の主人公が仲間たちとともに世界の真相に迫っていく物語

始まりの歌

——雨が降りしきる中、俺は今ナイフを突きつけられている。人生最大のピンチが今まさに訪れている

久しぶりに制服をきて登校すると、学校は文化祭ムード一色だった。何だか教室に入りにくくボーッと教室の前にたたずんでいた。なんせ一カ月ぶりの学校だ。教室の前でボーッとしていると後ろから急に声をかけられた。

「おつはよ、和樹！退院おめでとう！」

ビクツとして振り向くと、そこには昔から見慣れていた綺麗な栗色の髪と幼さが残る顔があった。綾瀬詩織、俺ん家のお隣さんだ。こいつとは小学2年生のときに知り合って以来9年間ずっと同じクラスだ

腐れ縁の幼馴染というわけだ。

「いきなり大声だすなよ！ビックリしただろ！それと、俺のことはお兄ちゃんって呼びなさい！」

バカみたいなことを言ってしまったが、詩織はかなり可愛い部類だ。しかもロリ顔、冗談でも言わない方が失礼だろう。

「うう…、ごめんなさいお兄ちゃん…」

本当に言いやがった。

「いや、お兄ちゃんは冗…」「じゃあ私委員会の仕事あるから。後でね、お兄ちゃん」

詩織はニヤニヤしながらそう言っ、生徒会室の方へと走って行った。

アホの詩織のおかげで緊張が解けた俺は、教室に入ることができた。皆全然変わってなくて、おれの退院を祝福してくれた。しかし、ただ一人皆藤純の姿がどこにも見えなかった。鞆はあるから学校にきてはいるんだろうが、誰もあいつの行方を知らなかった。

おれが知っているすごい優等生だった皆藤純は、あまり学校に顔を出していないらしい。最近では不良グループを次々に潰して回っているようだ。しかも相当数の不良を病院送りにしているという噂である。

その日は明日の文化祭の準備日だったため、夜の8時まで学校で作業をしていたが、一度も皆藤純の姿を見ることはなかった。

「本当にどうしちゃったんだろうな皆藤のやつ……」

家が隣同士の俺と詩織はいつもどうり一緒に帰路についていた。

「和樹が入院した次の日からだよ……死神が何とかって言ってて…

…」

”死神”そんなものはいるはずがない。人間っていうのは死神様に魂狩られて死ぬわけじゃない。病気とか怪我そういうのが原因で死ぬんだから。

「死神？おいおい、あいつ変な宗教に入っちゃまったんじゃないの？」

「そうかもしれないね……でも…」

「でも？」

「ううん、何でもないよ…」

詩織はそう言うのと黙りこくってしまった。気まずい沈黙だ。

家の前までくると詩織がさみしそうな声で「ありがとう、さよなら」と言った気がした。空耳だと思ったが…。

家に着くとすぐ風呂に入った。もう9月の半ばだとはいえ残暑がきつい。すぐ汗をかいてしまうので気持ち悪くていてもたってもいられない。風呂の中で考え事をしていたせいか、1時間も湯船に使っていたらしくのぼせてしまった。

風呂を上がると自室で雑誌を読んでいた。しかし、詩織との別れ際に聞こえた空耳？が頭から離れずに雑誌を読んでいるといつてもただ開いているような状態だった。

突然木片でも飛んできたのか窓に何かがぶつかった音がした。結構大きい音だったのだが最初は気にしなかった。しかし、3回4回と繰り返されると気になってくるもんだ。窓のほうに行き、何かかと思つてカーテンに手をかけた。

その時、勢いよく窓ガラスが割れる音がして破片が部屋中に飛び散った。その衝撃からか、蛍光灯はやられたようで部屋が暗闇に包まれた。そして、何者かが俺の喉元にナイフを突きつけていた。暗闇の中でさえわかる充血してしまっている眼、返り血も見える。すぐには誰だかわからなかった。しかし、一瞬雲の切れ間から月の光が差し込み、その人物の正体をあらわにした。

薄ら笑いを浮かべ、そこに立っていたのは皆藤純だった。

降臨の歌

太陽がまぶしい。オレが目覚めるともう昼前だった。

今日は女神が千年ぶりに降臨するらしい。まあそんなことはどうでもいいんだ。今日はオレがこの町に来た記念日なので、町の皆がパーティーを開こうというのだ。

この町は好きだ。記憶がない得体の知れないオレを受け入れてくれて住む家まで用意してくれた。

「あと5分……」

そう、パーティーの開始時刻の10分前。パーティーが開かれるのはこの町のはずれの集会場。全力で走っても20分はかかる。

急いで支度をして家を出た。ヨーロッパの町並みだっけ？ 異界の住人が伝えた建築物が立ち並ぶ。この町に来たときから思っていたのだが、なんだか昔から知っていた気がする。まあ、オレが前に住んでいたところもこんなところだろうから当然なのだが……。そんなことを考えながら全力で走った。

会場についた時にはもうパーティーは始まっていた。門を開け会場に入ると、そこにはマイが立っていた。しかもオレのことを睨んでいた。

「お・そ・い・よ」

「う……ごめんなさい……」

マイは腕につけた魔道具を鳴らしてオレの眼前に指を突き立ててき

た。魔道具——異世界の住人である証——災いをもたらすともいわれているが、この町の住人はそんなことも気にせずにマイのことを受け入れた。本当にいい人たちだなあ。

「ちょっと！ 聞いているの!？」

マイが今にも泣きそうな顔でこっちを見ていた。どうやら説教をしていたようだが、会場のいつもと違った雰囲気に見とれていたオレには一言も耳に入ってこなかったようだ。

「あゝうん……皆楽しそうだしオレらも参加しようぜ!」

「ちょっとバカシン！ 待ちなさい!」

マイを無視してオレは皆がワイワイ盛り上がっているところに次々に顔を出して、挨拶に回った。千年ぶりに女神様が降臨するというのに、結構な人数が集まっていた。参加できなかった人からも伝言として多くのお祝いの言葉をもらった。

（おい、聞いたかよ？ また”死神”ってやつが出てきたらしいぜ……）

（ええ、しかも襲われたのって隣の町なんですよ？ 魔法を使うらしいわ……）

魔法、魔道具の力を引き出すことによって生まれるエネルギーの塊。オレも使えるもんなら使ってみたい。だが、この力がこういうことに使われるから異世界人は忌み嫌われるのだ。

マイがこっちに手をふっているのに気づいた。さっきまで泣きそうだったマイは、デザートで機嫌を直したようでニコニコととてもうれしそうだった。

その時だった。真昼間なのに外が急に暗くなった。と思った瞬間、轟音が鳴り響き地面が激しく上下にゆれた。テーブルの上にあるものの多くは地面に落ちて、窓ガラスは激しく割れた。立っているのもままならず、オレはその場に座り込んでしまった。やがて揺れがおさまると、外が騒がしくなってきた。

「怖いよ、シン……」

いつのまにかマイが寄ってきて震えながらオレの腕にしがみついていた。オレは怯えるマイにそこで待っているように言って、様子を見に外へ出た。

そこで俺が見たのは、たった一人の少女だった。奇妙な格好をしていた。マイがこの町に来たときと同じような格好だった。そして背中には大きくて、なのに重さを感じさせないような神々しい翼が輝いていた。

「我が名はアルテミス…… 変革はもう始まっている……」

そういうと、アルテミスと名乗るその少女は翼を大きく羽ばたかせた。すると、竜巻が巻き起こりあたりにあったものを吹き飛ばした。竜巻はすぐに消え、その場には少女の姿は見えなかった。

アルテミス、千年に一度降臨するといわれる女神の名前。しかし、オレは彼女のことをどこかで見たことのある気がした。

その日、パーティーどころではなく、町の修復作業が開始された。女神の降り立った場所の周辺はクレーターのようになっていた。幸いなことにそこに人はいなかった。で怪我人は出なかったらしいが、オレの女神に対する怒りがおさまる気配はなかった。

「よかったね、誰も怪我しなかったんだって。女神様ってそういうのめちゃくちゃ考えてたんだよね」

「んなわけあるかよ。あいつは人が怪我しようが死のうがしたこっちはねえんだ」

「でも……」

「うるせえな！ あいつは最低の糞野郎なんだよ！」

女神への苛立ちから怒鳴ると、マイは黙りこくってしまった。よく見えなかったが、泣いていたんだと思う。

その日家に帰ると、マイに八つ当たりしてしまったことをひどく後悔した。いつまでも眠れずに窓の外を見ていた。

——いつの間にか俺は寝ていたようだ。外で何か聞こえる。何だこの音は？ 悲鳴！？

あわてて外を見ると町の中心部が燃えていた。そして、傷だらけのマイの姿が見えた。

開戦の歌

オレは今、化け物と対峙している。そして、オレの後ろには気を失ったマイが……。

この怪物は死神だ。人体を変質させて人を襲う者たち。鋭い牙、真っ赤な体、3メートルはあるだろう巨体。まるで人の原型をとどめていない怪物だ

（ヤバイヤバイヤバイヤバイ……）

本能が逃げる叫んでいる、足がすくむ。だが逃げればマイは確実に……コロサレル――

オレは持っていた短刀を怪物のほうに構えた。しかし、その直後オレは近くの壁に激突していた。一瞬にして怪物に吹き飛ばされたのだ。

嫌な音がして、腕に激痛が走った。腕がおかしな方向に曲がっている。足がすくんで立ち上がれずに、俺は激痛と恐怖に耐えていた。怪物のほうを見てみると、やつはマイの方にゆっくりと向かっていた。マイを軽々と片腕で持ち上げて、牙をむき出しにしてその大きな口を広げた。

マイヲクウツモリダ――一瞬で血の気が引いた。その一瞬は本当に長く感じた。残虐なイメージが頭をよぎり、気がつく俺はその怪物のほうに突っ込んでいった。

「ウガアーーーー」

怪物の体中に傷ができていて、もがき苦しんでいる。何が起ったかわからなかった。気がつく俺とマイは怪物の傍で倒れていた。そして、オレの右手の親指には見たこともないような漆黒の大振りな指輪がはめられていた。不思議な感じがした。その指輪から力は

不思議な力があふれていて、オレを包み込んでいるような気がした。腕も何事もなかったかのように元に戻っている。すぐに察した、それは魔道具なのだ――。

まだ呆然としている頭をたたき起こして、指輪に意識を集中させると右腕に信じられないくらいのが力がみなぎってきた。とにかく何も考えずに思いつきり怪物の腹をぶん殴った。すると、怪物はふつとんでいき、さっきのオレのように激しく壁にたたきつけられた。その腹は筋肉が食い込み陥没していた。怪物は何かうめいているようだが、もう襲ってくる気配はなかった。とどめとばかりにオレは短剣を手にとってゆつくりと怪物のほうへ歩み寄った。

――なぜこの世界にやって来たのかは覚えていない。一ヶ月前、皆藤に襲われかけたところまでは覚えている。だが、俺は今ここにいる。あたりにはごつごつした岩肌がむき出しになっている荒野しか見えない。人間も、死神も木も草もない。そこで、俺は今戦っていた。

「千石、もっと集中しろ！ 修行になんねえだろうが！」

「うつせー、滝口！ わかってんだよこの強暴女が！」

「2人とも、そろそろやめたほうが……。」

滝口香奈と西浩平。この二人は幼馴染らしく、俺より1つ年上だ。長い黒髪に整った顔立ちの滝口、西は色黒でごついやつだ。

俺より1年前にこの世界に送り込まれたという二人は、俺にこの世界で生きるための術を教えてくれた。

魔法、大きく分けると2つあるらしい。光の力と闇の力。光の力つ

てのはまあ魔法使いが使う魔法だな、ド。クエで言うメラとか。闇の力ってのは強化魔法で、ドラク。で言うバイキルトとかだな。まあ属性やら何やらが色々あるらしいんだけど……。この力がなければ、俺たちを襲ってくる死神ってやつらにすぐやられちまう。たった一つの対抗手段ってわけだ。そんなこんなで俺は2人に稽古をつけられているんだ。

それにしても滝口は強暴だ。長い黒髪をたなびかせながら思いっきり大剣で切りつけてきた。闇の力の所持者だってことが十分にわかる……。

俺は攻撃をかわしながら銀色に光る左手の指輪に意識を集中させた。すると俺の周りの空間がゆがみ、俺の姿が消えた。滝口はキョロキョロと俺のことを探している。しかし、何かに気づいたのか大剣を振りかぶった。

——気がつくとい日が暮れていて、滝口と西が火をたいていた。

「俺……」

「やっと気づいたかヘタレ。あたしの攻撃もろにくらって気絶してたんだよ。」

「千石君の魔法はずいぶん良くなってきたんだけどね。幻にほとんど歪みはなかったし。香奈がちよっと強すぎるんだよね。」

「一瞬でも隙を作るやつが悪い。気を抜いたらおしまいなんだよ。特にお前の場合は。」

たしかに、俺の魔法の範囲は俺の周囲1メートルしかない。一瞬でも幻が歪めば簡単に場所を特定されてしまうのだ。だけど歪みといってもほんの少し、眼を凝らして見ないと絶対に認識できない程の

レベルには到達しているはずだ。お前は動物かなんかだろ、言いそうになったが殴られそうなのでとりあえずは止めておくことにした。

「そういえば、明日はこの世界の女神様つてのが降臨する日だね。」

珍しく西が沈黙を破った。この情報は、食料調達のために俺が町に幻想魔法を使って忍び込んだときに得た情報だ。

「本当か、浩平？　女神様なんだつたらあたしたちもこの世界に帰してくれるんじゃないか？　その女神様とやらを探しにいこうぜ！」

こちらも、珍しくキラキラした目をしながら滝口が食いついてきた。

「うーん、でも千年に一回しか現れないらしいし、伝説かも……。下手に動くとまた死神たちに襲われるかもしれないよ？」

「伝説だつて賭ける価値はあるだろ！　元の世界に帰りたくねえのかよ！？」

西は困ったという顔で俺のほうを見てきた。俺に振るなよ……。その横で滝口が「行くよな？」と無言の圧力をかけてきている。お前もか……。

結局、この夜は2人の言い争いが続き、滝口が押し切って西に無理やり承認させた。まあ、滝口が何をしたかは言わないでおこう。でもこれだけ言っておく。ホント強暴女だ。

開戦の歌（後書き）

えつと三話目です。ここまではある程度出来上がっていたのでスムーズに更新してこれました。

いやゝ改めてみると展開おかしいですね、お恥ずかしい（汗）

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。次回からはもっと物語を動かしていこうと思っています。よかったら次回からも読んでいただけると幸いです。では、また次回。

絶望の歌

俺たちは千年前に女神が降臨したといわれる聖地を目の前にしていた。

2日前、空が急に暗くなったと思うと光の玉がふつてきた。この聖地と呼ばれる神殿は方角的には、光の玉が落ちたところに近い。

なんかの古代文明の壁画みたいなのが壁一面に描かれていて、俺でもわかるくらいに魔力が満ち溢れていた。

「女神様つてのはどこにいんだろっな」

滝口がなんの躊躇もなくその中に入っていた。続いて俺と西も中に入っていく。

神殿の中はとても暗く、冷たい空気が肌に当たる。どうやらとても広いようだ。さっきからいくつもの分岐点があったが、滝口は迷わずに進んでいく。

なぜ迷わないのかと西に聞くと、滝口は魔力の探知能力が優れているらしく魔力を辿って進んでいるのだという。どうりで俺の幻も簡単に見抜くわけだ。

かなり進んだところで、滝口は急に足を止めた。

「どうしたの、香奈？」

西がそう聞いても滝口は何も答えない。殴られそうだったが俺が顔を覗き込むと、滝口は何かに恐れているようだった。暗がりによく見えなかったが、肩もすこし震えている。

「死神だ……後ろから1体近づいてきてる」

「んじゃ倒そうぜ」

「無理だ！ あんなのとやりあつたら一瞬で殺られちまう」

今まで死神に2度遭遇したことはあるが、いつもは余裕綽々な滝口がこんなになつたことは一度もなかった。どうしようもなくなり、西と俺は各々の魔道具に魔力をこめ始めた。

「やめろお前ら！ 逃げるんだよ、早く！」

滝口の必死の叫びがむなしく響き渡り、次の瞬間黒い球体が俺と西を遥か後方に吹き飛ばした。

「ぐうつ！」

いてえ、モロにくらった。西は持ち前のタフネスで何とか立ち上がったみたいだが、俺はちよつと立ち上がれそうにない。

「あれゝ、久しぶり千石君。僕のこと覚えてるかな？」

どこかで聞いたことのあるような声だった。それにどこかで見たことのある風貌。

西の方から火の玉が飛び、その死神に直撃した。煙が上がり、視界が悪くなる。

鈍い音がした人のうめくような声も聞こえた気がした。

「イヤー——！」

滝口の悲鳴が聞こえる。煙が晴れてくると、俺はすべての事態を飲

み込み悪夢を見せられているような気分になった。

——そこには腹に大穴をあけられ、白目をむいている西の死体があった。そして、今にもその西を喰おうと、口を大きく広げている死神。そこにはあいつがいた——

——あの事件の3日後、オレたちは旅に出た。あの夜襲ってきた怪物は、確実にマイを狙ってきた。他の人間に対しては執拗に追いかけてきたりはしなかった。だがマイだけには違った。執拗に追いかけて、助けに入ったオレをただ吹き飛ばし、拳句の果てには喰おうとしていた。

異世界の住人は災いをもたらす——あの事件のあと、みんなのマイに対する視線が変わった。表面上はいつもとあまり変わらないようだったが、マイの周りから人がいなくなっていた。それは、異世界人の証である魔道具を見につけたオレも同じだった。皆に迷惑はかけられない。俺たちは自ら旅に出る決心をした。

「ねえ！ 聞いているのシン！」

「え？ あ……すまん、なんだっけ？」

「だからあ、女神様ってどんな人だったの？ あたしに似てたとか言ってたけど……」

「ああ女神ね。似てたよ、お前が町に来たときの服と。まあ、可愛さは断然あっちの方が……。ぐっ！」

かなりいい感じにマイの拳がみぞおちに……。

「シンの記憶に元の世界に帰る方法……はあ、やること多すだよ…」

「うだうだ言ってもしょうがねえだろ。それに、俺の記憶はどうでもいいって」

「でも、女神様ならどっちも何とかしてくれるよね」

この世界のことは何もわからない。だったら創世の女神アルテミスのところに行くくらいしかオレたちは思いつかなかった。俺たちは女神の手がかりをつかむため、二千年前に女神と共に世界を救ったといわれる勇者が封印されている祠に向かっていた。

――祠に着くと、そこには、目を覆いたくなるような光景が広がっていた。

強烈な腐臭。そこには、まだ完全に白骨化していない屍が大量に転がっていたのだ。

マイは青白い顔をして、その場に座り込んでしまった。

俺は恐ろしくなり、一歩後ろに下がってしまった。それでも、震える脚をムリやり動かし、マイを引っ張ってその祠の中へ入っていった――。

悪魔の歌

——悪魔のような風貌をしたそいつは、もう西の死体を口の手前まで持ってきていた。

「ああああああ！」

滝口は剣を抜き、鬼神のごとくそいつに飛び掛っていった。だが、そいつは難なくそれをかわし、さっき俺達に放った黒い球体を滝口に放った。滝口は後方に吹き飛ばされ、その場でうめいていた。

「邪魔すんなよ。ゴミ虫が」

西が食われそうになっているというのに、俺にはどうしようもできなかった。俺の力のなさをうらんだ。幻想という弱い力を……。だが、俺はあきらめるわけにはいかなかった。魔力を集中させ幻想を作り出す。俺は幻想で作り出した炎を体に纏わせて、その悪魔の元へと走っていった。

「へえ、千石君は炎の魔法を使うんだ」

そいつはニヤリと笑い西を放り投げると、さっき俺たちを攻撃した黒い球体を手に出現させた。それは、次の瞬間にぐにやりと変形して剣のような形になった。

やられると思い目を瞑ったが、攻撃がくる気配がない。金属音がして目を開けてみると、そいつと滝口が目にも止まらないスピードで剣を交えていた。

感覚強化の魔法を操る滝口は、その魔力を集中させ、そいつと互角にやりあっていた。

「その退魔の剣厄介だねえ。僕の力でも斬れないなんて……」

「」

黒い剣が折れて、その先端が俺のすぐ目の前に刺さった。

「あらら、斬られちゃったよ」

「お前もたたき斬ってやるよ！」

滝口はそういつて斬りかかった。

しかし、滝口が剣を振り下ろした後には何もなく、そいつは西の目の前に立っていた。

「人間風情が死神の上級種に敵うわけないでしょ。でも、さっきの魔力を消費しちゃったからこいつもらうね——」

「止める——！」

おれは状況を把握できずに、その中でただ一人茫然としていた。

その光景は「喰う」というより「吸収する」という形に近かった。

西の頭を口の中に突っ込み、魔力を吸い出していた。魔力を吸い出された西の死体は、どんどん干からびていき最後に残ったのは灰の山。

吸収し終わると、そいつは滝口に飛び掛っていった。激昂した滝口もまた、そいつに斬りかかっていった。

そのスピードはさっきまでのそれを更に超えていた。しかし、怒りで我を忘れたような滝口が敵う相手ではなかった。

退魔の剣は飛ばされ、そいつの拳が滝口の腹に入る。滝口はその場

に倒れこんでしまった。無防備な滝口を持ち上げて、そいつはさっき西を喰ったときのように滝口を食おうとしていた。

その時になってやっと俺は正気を取り戻した。

魔力を集中させて、自分の姿を消した。そして、滝口を救うため、そいつのもとに近寄っていった。だが、集中力が散漫していた俺ではどうすることも出来なかった。

「そんな幻覚じゃあ誰でも気づくよ……。千石君」

そいつの手から黒い剣が出てくる。あの日の夜のようにこいつは俺にその剣を突き立てた。

皆藤純——あの日も、今も、こいつが全ての始まりだった。

そして、俺はまた死を覚悟した。走馬灯のようなものが俺の頭をよぎった。

——母さん、今まで本当にありがとう……。でも、俺もう元の世界には戻れないや。

父さん、勝手にいなくなつてごめん。20歳になったら一緒に酒飲むって約束破つちまつたな。

学校の皆は今何してんだろ。かつたるい授業受けてんだろうな……。俺も皆と一緒に卒業くらいはしたかったな。

詩織……。俺は、ずっとお前のこと……。。

その時だった。暖かい光が全身を包んだ。それは、何かを語りかけてきているような、どこか懐かしい感じがした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2908n/>

鎮魂歌

2010年10月18日18時26分発行